

## 東北アジア共同体・研究序説

### A note to the study on the Community of the north-east Asia

黒 沢 惟 昭\*

Nobuaki Kurosawa

#### 目 次

1. アジアへの関心
2. 戦後日本の地域構想
3. アジアの戦争
4. 日本の平和と近隣諸国
5. 最近のアジアの動向
6. 「東北アジア」の捉え方
7. 「大東亜共栄圏」－戦後のアジア観
8. 地理上の「アジア」
9. 東北アジアの特徴
10. 要石としての朝鮮半島
11. AU 構想と日本の歴史的総括

#### 1. アジアへの関心

##### 1 中国・東北師範大学との共同研究

これまで、ヨーロッパを中心に、研究をしてきました。アジアに関心はありましたが、研究対象にすることはなかったのです。

ところが、東京学芸大学に勤務していたときに、中国の東北師範大学と、3年間にわたって共同研究を行う機会がありました<sup>1)</sup>。これがアジアについて、具体的な研究を進める発端になりました。

##### 2 廣松渉氏の提唱

2番目は哲学者の廣松渉さんの提言への関心です。亡くなる少し前、94年の3月16日の『朝日新

聞』の夕刊に、「東亜が歴史の主役にならなくてはいけない。欧米中心の時代は過ぎた」という趣旨のことを書いたのです。年配の方々は「大東亜共栄圏」という言葉にある種の感慨を抱かれると思います。名称は「共栄」ですが実相は日本がアジアの盟主になる、という意味で、戦後とくに左翼の間ではタブーの文言であることはよく知られています。もちろん廣松さんはそれとは違った意味で用いたのですが、今こそ日本と中国が中心になって東亜の新しい体制を創らなくてはならないのだ。マルクスの研究をされていた哲学者がこういうことを言い出したので、多くの人々を驚かせたのです<sup>2)</sup>。

私も当初は「おや?」と思いました。しかし、よく考えてみると、廣松さんの哲学は、欧米の「実体」論的思考を批判する「関係」論的哲学です。したがって、廣松さんは仏教の「空」という考え方に共感を示していましたので私は納得できたのです。かつてそれは右翼思想に結びついていましたが、思想の面から「アジア」を復活させなければいけない。その中心を日本と中国が担うべきだという提言だと思います。ということで、多くの方々には唐突だったかもしれませんが、私には共感できる主張でした。これも大きな契機になり、敬愛する廣松さんの遺志を引き継いでやるのだという意気込みがあったと思います<sup>3)</sup>。

\* 社会福祉学部教授

### 3 韓国教員との交流

3 番目には、韓国の教員たちとの「教材研究」があります。現代史をどう認識しているか。お互いの授業を通してどのように、現代史を教えているのかを具体的に確かめようじゃないかということで、5年ほど前に、南京で日本と中国、韓国の研究者、教員、市民団体代表が集まって、研究集会が開かれました。私も、そこで報告したのですが、そのときは、研究者が多かったものですから、細かい資料が提出されて、専門的討議になった感があります。そういう議論も必要だが、ごく普通の小学校や、中学校や、高校の教員たちが、どんな教材を用いて現代史をどのように教えているか、まずそういう作業から始めようじゃないか。ということになり、日本と中国と韓国の教員が、具体的な授業を報告しあう交流会を何回か積み重ねました。私も全ての交流会には出られなかったのですが、韓国の教員たちとの交流会には4回ほど出席しました。非常に勉強になりました。私を含めて日本人の多くは如何に、近隣諸国のことについて知らないかということを思い知らされました。最近では韓流ドラマなどの影響でそうでもないかもしれませんが、韓国の映画を幾本か見て感動しました。北朝鮮問題も少し前までは「反共」という立場からのみ捉えられていたのですが、最近の映画を観ると新しい統一した朝鮮を創っていくのだという意欲が感ぜられます。韓国に行き、そうした動きがあるのだということを現場の教員からも直接教えられました。ビビンバがおいしい、焼肉がうまいとかだけではなく、隣の国でどういう動きが起こっているのかということも知って、アジアのことを考える上で大いに勉強になりました。教材研究交流会の一端を述べました<sup>4)</sup>。

### 4 平和憲法の意義

4 番目は、日本国憲法を守りたいという立場です。私は戦後の平和と民主主義のなかで育ってきました。しかし、これらの価値が昨今急速に危うくなっているのではないかと思います。私が小学校1年生の時に戦争に負けて、非常に惨めな気持ちを味わいました。しかし平和憲法は大きな希望でした。そういう世代ですから、是非平和憲法は

守っていききたいのです。私の生きる原点でした。今もそれは変わっていません。注目すべきは「平和」と「民主主義」がいつも一対になっていたことです。戦後の精神ってなんだ、と問われると私は決まって「平和と民主主義だ」と答えてきました。ところが、少し以前に小田実さんの『戦争と平和』<sup>5)</sup>という本を読んで、平和と民主主義は必ずしも両立しないのだということを知りました。たとえばアメリカのイラク攻撃ですが、これはかつての日本やドイツのように軍国主義の国がイラクを攻撃したわけではありません。アメリカは民主主義の国の筈です。しかし、その国が海外へ出て行って、あのような残虐な爆撃をする。ですから、民主主義を国是とする国が必ずしも平和を守るとは限らないのです。かつてのベトナム戦争もそうです。フランスも世界に冠たる民主主義の国だと思うのです。自由、平等、友愛のスローガンを掲げて市民革命を世界に先がけて遂行した国です。しかし、ベトナムでどういうことをやったのかといえば、これは軍国主義とかファシズムと同じ残虐行為を犯したのです。民主主義の国が侵略したのです。国内では民主主義の国々が海外では平気で侵略をやるのだということを私は改めて考えさせられました。民主主義といえば直ぐにギリシャを思い出します。ギリシャは世界に冠たる直接民主制を世界で初めて実現したところとして有名です。ところが、一度海外へ行くとものすごいひどいことをやっているのです。相手を武力で屈服させて、男は皆殺しにし、女や子どもたちを奴隷にし、国内、仲間内では民主的なギリシャ人が、国外では残忍なことを平気でやったわけです。だから民主主義はすなわち、平和主義ではないのです。ところが日本国憲法こそまさに平和と民主主義を両立させることを明示している憲法です。ですから私は日本国憲法を改めて評価し直しました。小さい頃はただ、平和、民主主義といっていました。改めて考えてみると、世界にこんな素晴らしいことを盛り込んだ憲法があるのだろうか。私はつくづくと思いました。最も民主主義だと思っていた国々が平和主義ではなかった。だからこそ、平和と民主主義をともに実現しようとするこの日本国憲法の理念は思想として実に偉大なのだということを改めて考えさせられたわけで

す。これが4番目のしかも切実な契機です。

## 5 日本海（東海）の意味

それから5番目は、歴史学者網野善彦さんの教えです。資料1を見てください。非常に有名な地図です。いつも日本から中国・韓国を見ているから、日本を絶海の孤島だと思い込んでいます。私もそうでした。これは大陸の方から見た地図です。日本では「日本海」ですが、中国でも韓国でも「日本海」という言葉は使いません。「東海」と呼びます。日本の海ではないぞという意味だと思います。その話はともかく、日本海はまるで内海のようです。一昨夏（2005年）に初めて訪れたサハリンも非常に近く、稚内から40キロです。船で往復しましたが本当に近いと思いました。少々無理をすれば小船でも往来できます。ですから日本海は、太平洋と違って、日本と大陸を切り離す海ではなくて、むしろつなげた面の方が強かったのです。かなり小さな船でもどんどん大陸へ行くことができたのだということを網野さんが著書のなかでいっています<sup>6)</sup>。先ほど私は韓国へ行ったという話をしましたが、周知のように両国は昔から非常に近い関係にあったのです。ですから、もちろん、欧米の民主主義をはじめ諸価値を勉強することも不可欠ですが、同時にアジア、特に環日本海（環東海）を考えないと日本の平和は守れないと思うのです。後で述べますが、北朝鮮の問題で多くの日本人は不安を抱いているでしょう。この点を考えただけでも現実の平和を守るためには、ただ日本だけは平和でありたい、日本は平和憲法があるから大丈夫だ、ということでは駄目なのです。そのためにも、地域を広い視野から捉えないと日本の平和は俄かに危うくなってしまうのです。大切だと思っている平和も広い視野から考えない限り、守れなくなってしまうのです。このことを私が初めて考えさせられたのは、湾岸戦争のときでした。当時、海部内閣でしたが、日本は平和憲法があるから、派兵はできないといって90億ドルだか百億ドルを拠出しました。かなりの高額です。しかし、ぜんぜん感謝されなかった。金だけ出せばいいのかという批判が湧き起こりました。それであたふたと地雷撤去のために掃海艇が派遣されたのでした。であれば日本だけが平和憲

法を持っている、だから戦場に行きません、という論理だけでは世界の人々が納得してくれないのです。平和憲法を持っている日本は全世界では「普通の国」ではないからです。あとの国々の人々はみんな、ある場合には戦争をしてもいいのだ、いやすべきだ、という論理のなかに生きているのです。ですから先ほど言いましたように私は日本国憲法は理念としては、平和と民主主義を統合した素晴らしい憲法だと思っていますが、それを持っているのは世界の中では「普通の国」ではなく「特殊な国」なのだということを日本人はもっと考える必要があります。この「特殊性」をもっと普遍的なものにしていく努力を日本人は戦後怠ってきたのではないのでしょうか。これは私自身の反省でもあります。

## 2. 戦後日本の地域構想

そこで「地域主義」に移ります。私が参考にしたのは、和田春樹さんの『東北アジアの共同の家』（平凡社、2003年）と姜尚中さんの『東北アジア共同の家を目指して』（平凡社、2001年）という本です。姜さんの著書は国会の衆議院の憲法調査会の参考人として述べたことが主な内容になっています。日本の国籍を持たない人が日本の憲法について国会で意見を述べるということは画期的なことだと思います。

近年ヨーロッパにヨーロッパ連合、EUができましたが、それに学んでアジア連合、AUを考えるべきだと私は以前から主張してきました。

戦後の日本は広い視野の「地域主義」を考えなかったと思います。地域を非常に狭い範囲でしか考えてこなかった。もっと広くアジアとか世界というエリアにまでは考えようとしなかったのです。これには理由があります。先ほども申しましたが、戦争中に大東亜共栄圏という形で日本がアジアを考えたからです。「大」は、広いとか偉大なという意味もありますが普遍的という意味もあります。東アジア全体を考えながらお互いに繁栄していこうということが本来の趣旨です。このテーマエはいいのですが、実際には「共栄」は日本を中心にした東亜の支配と侵略でした。そのためのスローガンであったことは明らかです。こういういまわしい過去が、多くの日本人に共通してい

たわけです。大東亜共栄圏という「気宇壮大」なことを構想し、一部実現したが、実際にはそれは侵略だった。支配の手段、つまり間違っただのスローガンだった。だからこれからはそんなことは二度と言わない方がいい。そうした意識が戦後多くの日本人のなかにすりこまれたのです。しかも、戦後の日本は実質的にはアメリカにほぼ単独占領の形で支配されたわけです。アメリカの傘の下に入って難しい国際問題については、日本独自なことは考えなくてもいいという状況が長く続いたのです。つまり、アメリカの方だけ向いて、アメリカの意向に従っていれば安心していられたのです。国際問題は全てアメリカに任せて、日本は経済復興に専念すればいいのだ。これが戦後日本の国際戦略だった。さらに、ある人が言っているのですが、日本がどうしてあのような戦争に至って不幸な結果になったのかといえ、それは日英同盟を破棄したことに遠因があるというのです。イギリスという当時は世界で最も勢力のあった国と同盟を結んでいたのに、おろかにもそれを破棄したために、結局戦争までしてしまった。アジアの孤児、世界の孤児になっていったという苦い経験がとりわけ外交官のなかにはずっと刻印されていたのです。外交官出身の、戦後の有名な総理大臣であった吉田茂さんのなかにもそれがあって、戦後の最強国はイギリスにかわってアメリカだ。アメリカとさえ仲良くしていれば日本は安泰だということになったのではないかと。それは日本人の多くにも共通した考え方だったと思います。戦前・戦中の反省が、言葉は悪いですがトラウマのごとく日本人の心中に刻まれたのだといえましょう。他の国との関係はどうでもいいとまではいわないが、アメリカさんにまかしておけば大丈夫だという、ドライといえますか、割り切った心情が戦後日本人の多くに共通してあったと思うのです。

これが地域を拡大して考えられなかった原因です。

### 3. アジアの戦争

それからもう一つ、戦後の日本は確かに平和でした。今まで日本の自衛隊も戦争で人を殺したことはないし、日本人もそういう目にあったことはありません。世界史でも稀有の60年間で、そうい

う点では平和憲法を守ってきたのです。ところが日本以外のアジアの国々はどうかという、これはもう戦争の連続です。つい最近までそうでした。資料2を見てください。東北アジアは戦争の80年だったことがわかります。日本は戦争に負けました。その結果平和憲法を守ってぬくぬくと生きてきた。言い方はよくないですが、そういうことではないですか。ところが省みれば、戦後まもなく中国の内戦が始まりました。国民党と共産党の内戦が続きました。それからインドシナ戦争、つまり第一次インドシナ戦争が激化します。それはフランスとベトナムの戦いです。結局フランスは敗退しました。それから、朝鮮戦争が起こりました。中国が義勇軍として参戦します。これは「公然の秘密」ですが、ソ連が武器の供与を行いソ連の戦闘機が北朝鮮軍に参加する。ですからこの面では米ソ戦争でもあったわけです。前述のように米中戦争でもありました。朝鮮戦争は単に朝鮮が南北に分かれて戦争をしただけではないのです。こういうことも私たちはあまり知らなかったのではないですか。それから60年代にはベトナム戦争が起こります。第二次インドシナ戦争です。まさにアメリカとベトナムが全面的に戦争を開始する。その際に韓国も当時5万人の兵を派遣しました。ですから、これは韓越戦争、つまり韓国とベトナムの戦争でもあったのです。それから中国とソ連が衝突します。その頃は一枚岩の社会主義国家にそんなことはありえないと私は思っていたのですが、武力衝突に至りました。つまりソ連と中国の戦争です。75年に一応ベトナム戦争は終わります。アメリカの敗戦という形で。ベトナムでは「惨勝」といわれていますが、非常に悲惨な結果に至った。圧倒的に被害はベトナムの側のほうが多いのですが、とにかくアメリカを追い出すことに成功したという点では、やはりベトナムの勝利だった。繰り返しますが、日本だけは平和だったけれども、日本以外の東アジア、東北アジアが戦争に明け暮れていた事実を私たちは忘れてはならないのです。要するに、戦争のために近隣諸国はあまり日本に干渉する余裕がなかったのです。一方では先ほど申しましたように、日本はアメリカの傘の下にいたものですから、全てアメリカに任せてアメリカの言うことを聞いていれば、それ

ですんだ。海外のことはアメリカに任せて日本は経済復興、金儲けに励んでいればよかった。とにかく平和を守ることができた。そういうふうに見えるのではないか。つまり、一国平和主義が、可能になったのは、隣国・近隣諸国の戦争という事実が大きな原因になっていたと思うのです。

#### 4. 日本の平和と近隣諸国

しかし、それが90年代から崩れてきた。湾岸戦争によって多くの人々が血を流しているときに日本には平和憲法があるからいいんだ、といっていられるのか、なぜ日本人だけにそれが許されるのか、と迫られたわけです。そう考えますといままのように一国平和だけでやっていけないのではないか。私にとっては非常にショックな出来事でした。その時以来日本の平和憲法をどう考えたら守れるのかということを深刻に悩みました。そこで思いついたことは憲法を守り、平和を守るためには日本だけを考えていては駄目だ、広く世界を考えるべきだが、さしあたっては隣国、韓国とか中国、あるいはロシアとか、つまり日本海を取り巻いている国々、もちろんアメリカも含めなければなりません、そういう国々と協力・連携しない限りこの日本国憲法の理念を実現することにはできないと思うようになったのです。その頃森嶋通夫さんの『日本の選択』（岩波出版、1995年）を読みました。そのなかで、日本の経済を考えるには、一国主義やアメリカだけを見ていては駄目だ、近隣の国々のことも考えよ。政治体制は違うかもしれないが、経済だったら一緒にできることが沢山あるのだという趣旨が説かれているのです。しかもアジアの平和を保つには、これは氏の主張の面白いところですが、大いに混血を行って混合民族にしまえよというのです。下関と釜山の間に海底トンネルを作ってどんどん行き来できるようにして、韓国人なのか日本人なのかわからないようにしまえばいいのではないかと述べています。この辺りの提言は問題があらうかと思いますが、要するにアジアに共同体を考える必要があるという提言です。これには私は大いに共鳴しました<sup>7)</sup>。ちょうどこの本を読んだ頃に前述した中国との研究交流が始まったものですから、これをベースにして私はEU、ヨーロッパユニオ

ンに対してアジアユニオン、AUを考えたらどうだろう、50年先100年先かわからないが、そのような連合体を目標にすることによって未来を目指せば、様々な問題も未来志向で解決できるのではないかと思いました。それからもう一人影響を受けたのは金田一郎さんという新潟産業大学の方です。『環日本海経済圏』という本をNHKブックスから出されて、そこで森嶋さんの提言をかなり具体的に書いています。たとえば、中国では図們江、北朝鮮では豆満江と呼ばれていますが、そこを中心に環日本海の経済協力が進んでいる状況も述べています。政治体制としてはもちろん社会主義と資本主義は違いますが、そうした違いがありながらも経済的には協力が進んでいる状況を具体的に知りました。前述の中国の経済学者との交流研究でも同様の報告が行われました。事実、経済面ではかなりの連携が進んでいるのです。まさに網野さんがいわれるように日本海は決して日本を孤立させる海ではなくて逆に自由に交流できる内海なのだという思いを深くした次第です。こうした状況を勘案しますと、私はやはり、アジア、これは広いですから、まず、東北アジアを、日本的に言えば、「環日本海」に限定してもよいですが、「国内の狭い地域」を拡大して構想する必要がありますのではないかと思います。先ほど紹介した和田さんと姜さんの本を熟読しまして、ますますそういう考え方を深めたのです。ですから「地域」を日本のなかだけで考えるのではなく、せめて東北アジアにまで拡大して考えてみる必要があります。アメリカもご承知のように「ユニラテリズム」によってイラク攻撃を行いました。国連で反対されてもアメリカだけでやりました。一国主義をあのイラク戦争で実証したわけです。であれば、これまでのようにアメリカばかりに頼っていて日本は大丈夫か、という不安感を私は強く抱かされました。アメリカに敵対するわけではありませんが、アメリカ一辺倒ではなくて、環日本海の平和の視点からアジア、それとの関連でアメリカのことも勘案する必要があるという確信が次第に強まってきたのです。

#### 5. 最近のアジアの動向

そこで、近年のアジアの動きを見ますと、一つ

はASEAN プラス三首脳会議が注目されます。2001年の11月にクアラルンプールでの第五回会議に、東アジア・ビジョン・グループの報告書「東アジア共同体をめざして—平和、繁栄、進歩の地域」が提出されました。そこでは東アジア共同体が目指されているのです。これは画期的な文章だと思います。重要なところだけを抜き書きしましょう。(前掲和田書による)

「我々東アジアの民、原文では the people of East Asia、は地域内の全ての諸国民の全面的な発展に基礎をおく、平和繁栄、進歩の東アジア共同体、East Asian community を創造することを希求する」

今までのように一国だけではなく東アジアを一つの共同体として創造していこうという点に留意を促したいのです。それから2002年の9月17日に当時の小泉首相が平壤に赴いて金正日氏と会い、平壤宣言を出しました。本当に素晴らしいことをやったと思いました。その第四項目に次のように書いてあります。

「双方は北東アジア地域の平和と安定を維持、強化するため、互いに協力することを確認したい。双方はこの地域の関係各国の間の相互の信頼に基く協力関係が構築されることの重要性を確認するとともに、この地域の関係国家との関係が正常化されるにつれ、地域の信頼醸成を図るための枠組みを整備していくことが重要だと認識を一にした」

国交のなかった両国にとっては画期的な宣言であり、大きな期待、希望を持ちました。姜尚中さんも在日の知識人の一人として非常に感動して、これから日本と朝鮮についての、環日本海の新しい関係ができる期待を持ったといっています。残念ながら、急に「拉致問題」が出てきて、今や両国の関係はかなり冷え込んだ状況になっていることは周知のとおりです。非常に残念です。この点についてはまた後に触れましょう。

もう一人の主役は盧武鉉さんです。韓国の大統領(当時)ですが、氏の政策構想は画期的ではないでしょうか。その一部を引用しますと、「東北アジアの中心に位置する韓半島は、中国と日本、大陸と海洋を結ぶ架け橋だ。欧州連合のような平和と共生の秩序が東北アジアにも構築されること

が私の年来の夢である」と語っています。ですから、地域を拡大して東北アジアの「共同の家」という構想も決して単なる夢ではないことを指摘したいのです。楽観は許されないのですが、そういう動きが徐々に起こってきているということに私たち日本人はもっと注目すべきではないかと思うのです。

付記 経済面から最近の東アジア共同体の可能性をトレースした次の書も大変参考になる。谷口誠『東アジア共同体—経済統合のゆくえと日本—』(岩波書店 2004年)

少し旧いが次の書も参照されたい。吉田康彦・進藤栄一編『動き出した朝鮮半島・南北統一と日本の選択』(日本評論社 2000年)

## 6. 「東北アジア」の捉え方

では東北アジアという地域をどのように考えたらよいのかということについて考えてみましょう。ここで重要なことは、「地域」というものは、まず客観的に「在る」というものではないと思うのです。そうではなくて、私たちが「地域」をどう捉えるか、つまり主体の認識が地域を創っていくのです。今までは無関心であった場所が、当事者の考え方を変えることによって新しい「地域」として見えてくる。こういう捉え方が大切ではないかと思います。だから地域というものは何か実際に「在るもの」を発見していく(discover)のではなく、私たちが主体的に創り出していくものなのです。そう考えるべきです。例えば north-east は英語ですがこれをそのまま訳すと、「北東」です。北東アジアは north-east Asia の訳ですが、この用語は本来欧米の人が使っているのです。中国の歴史を調べてみますと「東北」という言葉の方が普通に使われています。先ほど言いましたように中国の研究者と私たちが共同研究を行った相手の大学は東北師範大学、日本にも東北大学があります。日本でも、中国でも使われるのは「東北」の方が一般的です。そうであれば、「北東」アジアではなく「東北」アジアと呼ぶべきです。日本やアジアの「文化」を中心としながら、その立場から、今までの反省を込めて地域をどう捉えるかという意味では東北アジアのほうがよいのです。言葉にこだわるようだけれど

も、そういう問題も出てきます。それからもう一つ「極東」、far-east も使われます。そのほか中東とか近東とかもよく言われます。考えてみればこれまたヨーロッパ中心の用語です。ヨーロッパに一番近いところが近東、それから一番離れたところが極東です。こういう考え方はおかしいのではないか。やはり、私たちが「地域」を主体的に考えるためにはアジアを中心に考える必要があります。ですから、今後の用語としては東北アジアを使いましょう。これからは歴史を創っていく、地域を確定していく主体をどう捉えるかを確定しなければなりません。もうあなた任せとか、あちらさん任せという非主体性では駄目です。ヨーロッパ中心の歴史観に立つのではなく、私たちのアジアから考えていこう、という意志を言葉にもこめていかなければならないのです。だから、そのためには独断的ではなく、過去、現在、未来を勘案しながら言葉を創っていく、その言葉を「創る」なかで私たちがどのようにアジアと連帯を生み出せるかを考える。そういうことだと思うのです。因みに、「東洋」という言葉ですが、中国を中心にして、中国の西側が「西洋」、東側が「東洋」です。だから東洋といえば中国の人から見て日本のことをいっていたのだということを学びました。つまり、「東洋貨」というと日本の製品のことをいい、「東洋鬼」は日本軍の兵士のことなのです。これは中国の人の歴史から生み出された言葉の意味付けの例です。日本は日本で考えていく必要があります。明治以来日本人の多くは、自分たちの地域、アイデンティティとしてこの東洋を考えたという文献もあります。でも次第にそれが自分だけが偉い、野郎自大になってしまい、韓国を併合したり、東洋の盟主を気取り、支配としての大東亜共栄圏という言葉を用いるようになってしまった。もちろんこれは全くダメです。言葉は歴史によって変動します。そこにどういう意味が込められているかということをいつも批判的に問いかえす必要があります。

## 7. 「大東亜共栄圏」一戦後のアジア観

「大東亜共栄圏」のポイントだけを述べましょう。1939年9月に、ドイツ軍がポーランドに侵攻を開始して第二次世界大戦が始まります。日本政

府は翌年8月1日に基本国策要綱をまとめました。「日満支の強固なる結合を根幹とする大東亜の新秩序を建設しなければいけない」これが大東亜共栄圏の呼び名の始まりのようです。

開戦によって、それまでは戦争の名前は必ずしも明確ではなかったのです。12月8日の開戦よりもずっと前に中国への侵略は始まっていたのですが、第二次世界大戦の関連でいえば12月8日に日本がハワイの真珠湾を攻撃したことが画期になります。4日後の12月12日の閣議決定で、初めてこの戦争を「大東亜戦争」と呼ぶとされ、その時から大東亜戦争という名称が正式に用いられたようです。その際に、「大東亜」とはなんだ、と問われました。つまり当時の歴史認識が問われたのです。地理的には、日本、満州、中国、インドシナ、シンガポール、フィリピン、蘭領東インド、それからビルマ、言いかえれば日本が進攻して占領した地域が大東亜という地域とされたのです。因みに、東条内閣の時に、大東亜会議が開かれました。かのチャンドラボースなども参加するのですが、これは連合軍の反抗が43年秋に予想され、それまで日本が進攻していった地域が反撃に遭うだろう、それに備えてアジア民族の結束を図り人的、物的にネットワークをつくるということが目的でした<sup>8)</sup>。

敗戦によって大東亜共栄圏の構想は完全に潰れてしまったわけです。その後、日本は地域社会の構想をアジアにまで広げるということに非常にナーバスになってしまった。それが一国のなかに閉じこもってしまった大きな原因になったのです。しかし戦後、それをいち早く復活させたのは、戦後と戦前の切り替えができていなかった人々、例えば岸信介氏です<sup>9)</sup>。60年安保の時は総理大臣でした。この人は東条内閣の閣僚だったにもかかわらず、なんと戦後15年にして総理大臣にまでなりました。頭の切り替えができなかった証拠です。先述したのは東北アジアですが、岸氏の場合は東南アジアに注目します。まず賠償をやることによって経済的に東南アジアを強化、支配する。もちろん「支配」という言葉は使っていませんが、そういう考えから東南アジアという発想をまがりなりにも出した人ではあります。彼の頭のなかには、繰り返しますが、戦前からの、つまり

東条内閣の商工大臣としてのエートスが残っていたのです。こうした例外はあるのですが、総じて、多くの知識人も、日本はどのような地域に属するのかというアイデンティティを殆ど考えなかったのです。しかし、少数とはいえ、岸氏とは全く違う立場からアジアを真剣に考えた人もいます。例えばその一人が上原専禄さんです。一橋大学の学長も務めた人ですが、この人が『日本国民の世界史』という本を書きました。これは高校の教科書として書いたのですが検定を受けられませんでした。しかし岩波書店から単行本として出版し、かなり読まれた本です。私も当時買って読んだ記憶があります。上原さんは独特の歴史認識、世界史像をもっていました。例えば普通、「世界史」はヨーロッパからはじまります。特にエジプト、ギリシャが重視されます。それからヨーロッパがあってアジアに移ります。ところが上原さんの本はアジアから始まります。特にバンドン会議、これは戦後アジアで初めて開かれたアジア人による国際会議ですが、その意義を上原さんは非常に高く評価しています。つまり、アジアをまず考えないと統一した日本人としての自覚はできないということです。当時、私は大きな驚きを与えられました。私が受けた歴史、世界史とは違った歴史像を考えておられたからです。あとはマルクス主義の立場から遠山茂樹さんなども民族の独立を主張していました。以上は私が知る歴史学研究のなかでアジアを考えなければ日本の独立は考えられないという提言の主な例です。しかし、アジア主義などと言いだすと、また戦前の大東亜共栄圏か、というアレルギーが多くの日本人のなかに強くあったことはたしかでしょう。

## 8. 地理上の「アジア」

東アジアをどう捉えたらよいか考えてみましょう。この場合、主体の側がどう考えるか、その読み方によって、「地域」も変わってくることは前述しました。経済を中心にして考えると、日本、韓国、北朝鮮、モンゴル、中国、ロシアの六カ国をアジアの経済的共同体として考える人が多いです。国連では日本、韓国、中国、北朝鮮、ロシア、これはアジア太平洋地域と呼ばれ、国連では一つのまとまりとして強く意識されています。そ

のサブ組織が東北アジアです。以下は和田さんの受け売りですが、中国の国際学者と和田さんとの話の中で、韓国、北朝鮮を一つの国の二つの「方面」とする考え方もあるようです。それから北朝鮮の『朝鮮大百科事典』では、「北朝鮮」、中国東北部、ロシア沿海、それから日本という四つの国、方面と考えれば韓国を入れて五方面として考える。このような考え方がこの百科事典に出ているとのことです。それにモンゴルを入れた方がよいのではないかと和田さんはいっています。これには反対はないでしょう。しかしアメリカと台湾をどうするかという難しい問題があります。両者を東北アジアの中に加えるべきかどうかということです。中国にいわせれば台湾は国連に入っていないから除外すべきだとなりましょう。これは中国としては当然の主張です。アメリカは望ましくないという主張もあります。しかし、今アジア地域には10万のアメリカの兵隊、若い青年たちがいるのです。これは良いか悪いかは別として、アメリカを除外して東北アジアのことは考えられないのではないのでしょうか。だからやはり東北アジアにはアメリカも入れた方がリアリティがあるのではないかと思います。和田さんによれば韓国、北朝鮮、モンゴル、ロシア、日本、アメリカ、そして台湾を入れることになります。ただ「台湾」を国として捉えるとこれは先ほども言ったように中国の反発が強いので、ここは工夫する必要があります。一つの考え方として、「島」として考えるべきだという意見があります。それから、和田さんはアメリカ「本国」はあまり関係ないので、ハワイ、アラスカを「方面」として考えようと言います。この和田さんの提言は面白いと思います。つまり、東北アジアを国家だけで考えないで台湾、沖縄、サハリン諸島とかクリル諸島、ハワイなど、大きな島も第二の構成要因として考えるべきでしょう。これらは単なる物理的空間ではないのです。東北アジアの平和を考えるにはどうしたらよいのかという立場から地域社会を規定するためにこうした捉え方は不可欠です。主体の側がどういう思想を持っているかで地域の捉え方が変わってくる事例です。



## 9. 東北アジアの特徴

それから東北アジアの特色について考えてみましょう。何回かヨーロッパに行って実感しましたが、ヨーロッパは非常に同質的なところがあります。言語一つをとっても、英語とかフランス語とかドイツ語の文法はそんなに変わりません。ある言語学者（金田一春彦氏）は、日本で言えば昔の青森の方言、九州の方言ぐらいの差ではないかとさえ言っています。それに比べて東北アジアは多様で異質な要素が大きいのです。文化的にも社会的にも政治的にも、非常に異質です。しかし、同質的なものを統合したとしてもそれは一つのローカルなものです。異質なものが連合できてこそ、それによって普遍的な意味を持つようになるのではないのでしょうか。だから東北アジアの連合ということは非常に困難を伴うけれども、これをやり遂げれば、画期的な、異質の統合つまり、普遍性をもつと思うのです。やり甲斐があります。

それから東北アジアではイスラム文明の影響が少ないのです。これは東南アジアと違う点です。またユダヤ人に対する偏見も殆どないです。これも統合にとって有利な条件です。もう一つは先ほども申しましたように75年までの間に不断の戦争が繰り返されてきたことも特徴です。こんなに長い間戦争をやってきたところは世界に余り例がありません。それから、今はソビエトもなくなりましたし、中国も開放経済が進み、かつての社会主義とは違った体制に移行しました。しかし、戦後、長い間は資本主義陣営と社会主義陣営の境界線が東北アジアの中に太く引かれていたのです。つまり資本主義と社会主義がこの地域で対峙していたのです。それから規模と面積、人口、GNPに大きな差があります。これも資料3に比較表があるのでみて下さい。たとえば、数千万の韓国・北朝鮮と十何億の中国というような人口でも大きく違います。多様性があるわけです。それから核の大国、中国とかロシアがあります。一方、被爆国日本、被爆者が多くいますから韓国をも含めるべきかもしれませんが、その両方が東北アジアの中に居住しているのです。分断国家と領土国家の現実も非常に厳しいものがあります。北方四島、竹島、韓国からいえば独島、それから尖閣諸島の

問題、この面で韓国、中国と厳しい対立を強いられています。島根県の県議会の条例の決議、それに対する韓国の反応を想起してください。非常に難しい事態です。しかし多様性と異質性を孕みながら、だからこそ「共同の家」を考えていかなければならないのです。異質性だけを強調すれば共同の家はできません。そうなれば前述したように、日本の平和は守れないのです。だからここで絶対踏ん張らなければなりません。至難ではあるけれども、異質性を乗り越えて譲るべきは互いに譲りあい共通性を拡大していくことが強く求められます。もしそれが実現できれば人類史の新しい第一歩が可能になるのです。それが実想されて初めて人類普遍の日本国憲法の理念が実現されるのです。私は日本国憲法を「現実に合わせて」変えるのではなくて、「日本国憲法の理念を、現実の方を変えることによって、実現していくべきだと考えます。」それこそ本当に日本を愛する心ではないか。そうではありませんか。

## 10. 要石としての朝鮮半島

ところで地域から見て中心になるのは「朝鮮半島」です。一番問題なのは1953年に朝鮮戦争の停戦協定が南北朝鮮で行なわれたわけですが、平和条約まで進まなかったのです。戦争用語を用いますと「打ち方やめ」という状態でしかないわけです。それがずっと50年以上も続いているのです。これは大変異常な状態です。「朝鮮有事」が続いているのです。それを何とか回避しなければいけない。たしかに、北朝鮮は、拉致問題一つをとりあげてもひどい国だと思います。しかし、ここは冷静に考えてみる必要があります。まず冷戦の終結です。89年にベルリンの壁が崩れ、91年にソビエトが消滅して、ロシアになりました。ちょうど日本がアメリカの傘の下にいたように、北朝鮮もソ連の傘の下にいたわけです。そこから離脱しなければならなくなった。期待の重油もこなくなつて、もう15年近くも経った。ですからアメリカとどうやって対抗していくか。今まではソビエトという大きな傘があつて、そこに入っていればよかったが、これからは強大国アメリカと直接対峙しなければならなくなった。その時に核を外交の駆引きに使うという、いわゆる瀬戸際外交、ギリ

ギリのところで交渉するという状態に追い込まれているのです。こういうことが一時的ではなくてかなり常態化しているのです。相当緊張した危険な状況がずっと続いているわけです。それから北朝鮮側に同情すれば、自然の災害がここ数年続いて起こっています。95年の大雨氾濫や96年の水害、97年には干ばつも起っています。

## 11. AU 構想と日本の歴史的総括

ところで、和田さんはこの北朝鮮のことを、「正規軍国家」と呼んでいます。同国では「先軍政治」といいます。つまり、人口二千二百万人の多くは軍隊が主導している国なのだ、これによって危険を回避していこう、外交も全て軍隊の責務でやっていこう、こういう国家体制です。しかし、二千二百万人の人口の多くはごく普通の人々だということを考えるべきではないかと思います。60年前の日本を考えてみれば理解できます。当時日本国民は天皇のために死ぬことが求められていた。特攻という自爆攻撃を世界で初めてやったのです。しかし、思い出してください。そのときでも多くの国民は、ごく普通の、子どもが可愛いか、家庭を大事にしようとかという人々でした。ですから敗戦になったら特攻精神はすっかり忘れてしまった。占領したアメリカ軍に抵抗してイラクのように反乱が起るかと思ったらそうではなかった。一部にはあったのですが。そこから推測すれば北朝鮮にも一部の狂信的な人々がいるとは思いますが、ごく普通の人々が圧倒的に北朝鮮の国民だと思うのです。これは60年前を知る日本人には一番よくわかるのではないですか。そうであれば、一面では拉致問題を批判しながらも他面で共存・平和を考える必要があるでしょう。もうひとつ。これは有名な報告書ですが、99年の10月に元国防長官であったペリーという人が「ペリー報告」を出しました。朝鮮が有事になった場合、どういうことが起るかという予測です。そうなれば、アメリカ、韓国、北朝鮮各国で数十万人が死ぬ。それから数百万の難民がでる。こういう状況が予測されているのです。だから簡単に戦争なんてできっこない、絶対やるべきではないということが結論です。そういう試算をだしたということは、日本も壊滅するということです。それを防ぐ

点からいえば、2000年6月14日に金大中大統領が北朝鮮を訪問したことは大いに有意義です。金正日氏がわざわざ相手の搭乗機のところまでいって出迎えて抱擁し合ったという非常に感動的なシーンが甦ります。それから南北共同合意文に調印しました。そこで画期的なことは、敵対から平和、和解、協力へ大きな転換が行なわれたのです。最も危険な南北の対立の中でこういうことが行なわれたことを思い出すべきです。しかし、プッシュ大統領が出てきて、イラクとイランともう一つ北朝鮮が悪の枢軸国であると名指しで非難しました。以来俄に危険な状況となり、せつかくまとまりかけたムードがまた冷たい関係になってしまったという経緯があります。一方、9月17日には当時の首相の小泉さんが平壤に行って「平壤宣言」を出しました。しかし残念ながらこれもまた拉致問題で逆戻りといえますか、現在の状況になったことは前述しました。

さてまとめに入りたいと思いますが、現実には私たち日本人が一番恐れているのは、やはり南北朝鮮の戦争だと思います。経済制裁などと軽々しくいう人々は本当に戦争についての覚悟はできているのか。ここで和田さんは前掲の書で北朝鮮の体制は防衛的で軍力は、米韓側よりかなり劣勢ではないかという予想をしています。だから北朝鮮側から戦争を仕掛けることはまずあり得ないと考えてもよいと観ているわけです。これはベトナム戦争のときに韓国が五万人をベトナムに派兵しました。韓国が北朝鮮に対して優位に立っているという確信がなければ五万人もの兵士をベトナムに派遣することはありえないということです。これは私が訪韓したとき韓国の知識人からも聞きました。そこでもし戦争があり得るとしたらどういう時か。次の三つの場合が挙げられます。

一つは、アメリカからの攻撃が迫っていると金正日体制が判断する時です。だから先にやらなければやられてしまうという、恐怖的判断です。つまり情報に関わる判断ミスは非常に危険な要素があります。だから先に攻撃しなければいけない、ということが第一です。それから外科手術的作戦が考えられます。アメリカがイラクに行ったように、金正日体制を倒さなければ北朝鮮の人民が苦しみ続けるのだという想念が根強くアメリカ側には

あります。今回のイラク攻撃も大量破壊兵器が発見されなかったが、フセインの悪政が倒されたからいいじゃないかと論理がすりかえられてしまったのですが、そういう論理にも結構支持者がいると思うのです。それからもう一つは、日本でもよく言われますけれども、北朝鮮の体制崩壊です。北朝鮮の国民が圧制や飢餓に嫌気がさし、金正日を倒そうとする動きが強くなった時、どうせ倒れるのなら先に自殺的に攻撃を仕掛けるかもしれないという予測です。これも可能性としてはゼロではないですが、しかしそんなことは殆どあり得ないだろう。和田さんはそのように予測しています。しかし、いずれにしても予測は予測でしかないわけです。したがって推測の域を出ませんが、もし戦争が起これば、ノドンミサイルはアメリカ本土まで飛んでいく能力はないために、まず、在日米軍あるいは在韓米軍の所に飛来するでしょう。さらに日本海側の原子力発電所が標的になる。専門家によると発電所をやられれば、日本海側の相当広い領域が放射能に汚染されて、核兵器が使われたのと同じような状況になってしまうとのことです。この程度の射程内での精度はノドンミサイルにもあるのです。これは非常に危険です。そうすると直ちに第七艦隊が北朝鮮を反撃する。そうなればほとんど北朝鮮は壊滅してしまいます。当然これは北朝鮮にとって恐怖でしょう。第七艦隊がいつ何処にどのように移動しているか、私たちはそんなことは殆ど考えないですが、北朝鮮は絶えず恐怖におののきながら第七艦隊の行方とその動向に非常に敏感になっていることを北朝鮮の軍人が告白しています。(前掲 和田書、参照)しかし、いずれにしても、そのようなことが起これば日本も破滅的な攻撃を受けることは間違いありません。だから、有事は絶対に起こしてはならない、これから朝鮮半島の平和を絶対に維持しなければならない。一にも二にもそれが絶対的前提です。なにはさておきここから話を始めるべきではないですか。私は軍事の専門家ではないのですが、少しでも勉強すればそういう結論に達せざるを得ないわけです。一方、東アジア諸国との協力、合意によってしか体制の存在はないということを金正日体制も知るべきだ。この点を何らかの形でつねに知らせていかなければならな

い。もちろんある程度は知っていると思いますが。そして韓国、ロシア、中国、日本も北朝鮮が核兵器の開発を中止し、国際的な協力を維持する限りはその体制との共存を拒否しないということが根本的条件だと思うのです。ここがポイントです。体制が悪いからぶっ壊せと簡単にいってしまうと、前述のシュミレーションの結果が起りうる可能性が充分あるのです。これは難しいと思いますし、私の専門を超えますが、東北アジア平和非核化条約の終結が重要性を帯びます。この場合、日本は経済協力の重要性を忘れるべきではありません。私たちにとって嬉しいことは、韓国は21世紀東北アジアの中心にならなければならないということ、盧武鉉大統領(当時)が宣言していることです。位置からいっても、やはり韓国の立場は非常に大きいと思います。そして何よりも、隣の北朝鮮とは同じ民族です。その平和の実現を私たちはまず考えていく必要があります。もう一つ大切なことはこの朝鮮民族の持っているディスアスポラです。朝鮮民族が様々な地域に居住していることの意義を考えるべきです。中国に朝鮮自治州があります。そこには約200万人がいます。北朝鮮の脱北者もそういうところに親戚関係を頼って住んでいるのです。それから旧ソ連には中央アジアを中心に48万人、日本には在日朝鮮人が87万人居住しています。確かに苦しみと悲しみはありますが、そういう人たちが国境を越えて朝鮮問題を解決してくれることへの期待は非常に大きいものがあります。この点に関連して、前述の姜尚中さんは「二重国籍」を提言しています。たとえば3年以上日本にいれば日本の選挙権を認めたらどうか、その代わりもう一方の国籍を外すという提唱です。一例ですが、これ以外にも様々なことが考えられるのではないのでしょうか。そうした便法によって日本との共同性を図っていくことができます。これも国会で参考人として氏は提言しました。

ところで、前述しましたが東北師範大の研究者との共同研究の際に私がAU構想を述べたところ、「それは大賛成だ、しかし同時に日本側の歴史的総括が必要ではないか。それを忘れてしまっては困る。それを忘れるならば、AU構想は第2の大東亜共栄圏になってしまうのではないか。そ

こをあなたはどのように考えるか。」と言われました。上海などではあまり言われませんが、東北の方に行くとき非常に厳しい答えがかえってきます。東北アジアの地域協力にとっての障害は、近隣諸国の過去の歴史に起因する「対日不信」が根強くあることだと思います。日本人の間では、すでに謝ったからいいじゃないかという意識があるかもしれませんが、しかし中国をはじめ近隣諸国では、先ほども言いましたように、75年までは長期の戦争のために、ナショナリズムについて充分考える余裕がなかったのです。日本に対しても、冷静に考える時間が無かったのです。しかし、戦争・紛争が一応終焉して、経済的にも発展するにつれて、当然にもナショナリズムが起ってきた。それで過去の総括をする必要が強く生じてきた。そういう状況ではないかと私は考えます。つまりこれはいきなり起ったのではなくて、起こるべきものが、内乱とかそういうことによって抑制されていた。あるいは意識下に沈んでいた。それが吹き出て、近年改めて急激に起こってきた。そういうことだと私は捉えています。

あと賠償問題です。これも詳しいことは省略しますが、日華平和条約では、相手が台湾の、当時の国民党政府だった時代でした。中国が国連に入る前でしたので、相手の足元をみすかして、賠償なしで条約を結んでしまった。日韓会談の場合もそうです。韓国で非常に反対があったにもかかわらず、過去を遺憾として反省するだけで表明して、基本的に賠償を拒否してしまった。その時、この「遺憾」というのは、果たして深く謝ったことになるのかということが問題になりました。言葉の意味としていろいろ問われるところです。72年に当時の田中角栄首相が中国へ行き、周恩来と握手しました。その時も深く責任を感じ、反省するという言葉を使ったのですが、「反省」というのは謝罪か、と周恩来から問われたのです。つまり「茶碗の水をこぼしてすいません」と言う事とどう違うのか、といわれたエピソードもあります。本当に日本は心から謝罪したのかということが、大きな問題で、いつも批判されるところです。それから天皇が、全斗煥大統領が来日した時に、宮中の晩餐会で「遺憾の意を表します」と言ったのです。その時、この遺憾というのは本当

に謝ったことになるのか、問題になりました。それから90年代に至り、個人補償の問題、特に従軍慰安婦の問題がクローズアップしまして、当時の河野洋平官房長官が謝罪し、なんらかの償いの必要があることを認めたわけです。しかし、政府、国家として償いをすることは拒否して、民間団体でやるということで一応落ち着きました。それは果して国家が謝ったことになるのか。ということも当時問題になりました。

しかし、画期的なことは95年村山内閣、当時の社会党の委員長でしたが、閣議決定に基く「村山首相談話」です。そこでは、アジア諸国の人々に対して、多大な損害と苦痛を与えました。心からお詫びの気持ちを表明いたしますと言ったことをご記憶の方も多いでしょう。これは高く評価されています。自民党と社会党それにさきがけも入った連立政権でしたが、戦後50年にして初めて到達した歴史認識であり、成果でした。一方日本の中には非常な反対もあったわけです。そういう事態に対して日本の右翼勢力は強く反発し、教科書問題から始まり、慰安婦問題は無かったとか、新しい歴史教科書の問題とかいろいろな動きが起きました。一面ではまた、金大中大統領が日本に来た時に当時の小渕首相と共に98年に日韓共同声明を出すきっかけにもなったのです。これは村山談話を韓国に適用したものとして非常に評価されました。「未来志向」という考え方が確認されたのです。しかし、その後、靖国神社問題が、小泉さんが何回も参拝に行ったことで起こりました。その頃、私は上海で復旦大学の学生たちとも議論をしましたが、周恩来が賠償を日本に破棄した条件の一つは、日本の戦争指導者と一般国民を分けたことです。A級戦犯と呼ばれる指導者は本当に悪い。だからこれは決して許さないけれども、ふつうの日本国民はむしろ被害者だったのではないのか。こういう論理で中国の国民を説得したのです。言葉はよくありませんが、中国の指導者が折角「つじつま」を合わせたのに、そのA級戦犯が祀られているところに、日本の総理大臣が参拝するということは、日中共同宣言の精神に反するのではないのか。面子が大きくつぶされた中国側の怒りもよくわかります。この問題については高橋哲哉さんが、『靖国問題』という本で詳しく分析

をしています。一つの解決策としては靖国神社とは別の共同墓地を建設すべきだという意見があります。たとえば、「平和の礎」という施設が沖縄にあります。これは敵国（アメリカ）の兵士でも戦争で死んだ人は全て同一として、皆で祀ろうという趣旨です。そのような国立の無宗教の恒久施設をつくるべきではないか。この提案に賛成する向きは多いと思います。しかし、たとえそういうものをつくっても、やはりまたぞろ総理大臣が参拝に行ったりすれば、国のためということになるから、「靖国問題」は解決しないのではないかと高橋さんは前述の書で懸念しています。ですから、「国家」とは一体何なのかということを徹底的に議論した上でないと、そういう新設の施設も大いに問題があるのではないかと。国家というものをどう考えるのか、国家のために死んだということとをどのように捉えればよいのかという問題を日本人全体が歴史的に総括していくこと、これは戦争をどう総括するかということでもあります。こういうことを抜きにしてただ、施設を変えても問題はあまり変わらないのではないかとというのが高橋さんの考えです。私もそう思いますが、しかし、靖国神社よりはずっとよいのではないかと思います。

それから拉致問題についても、和田さんがこういうことを言っています。「やっぱり、拉致が事実で、8人死亡という通告、何の罪の無い人をさらって行ってそれを隠し通そうとした。こんなことが許されることではないということも分かる。でも本当に解決しようとするのだったら、ただ金正日体制だけを批判して、制裁を加えるだけでいいのか、それで本当に交渉ができるのか」と。もっと冷静に考える必要があります。つまり怒りを抑えて、問題の解明、解決の外交的努力が不可欠だと思うのです。しかし、実際には、金正日スキャンダル、勝ち組とか、喜び組みとかを3日間連続して放送した民間放送局もあったように事態の本質を考えず、金体制がいかに酷いかという事だけの報道に流れています。確かに酷いところがあるということは私も認めますが、それだけでいいのかということです。一方国連に提訴するか、アメリカに訴えるとか。これも他力本願ではないですか。私たちは、36年間日本が植民地とし

て支配した国であるということを絶対に忘れてはいけないのではないかと。一昨年（2006年）2度中国に行った時も抗日戦勝利60周年ということで、ホテルのテレビを見ていると、如何に日本軍が残虐なことをやったかという、中国共産党の宣伝もあるかもしれませんが、そういう番組を終日やっていました。それから色々な記念館に行っても日本の過去の残虐シーンが展示されています。中国、韓国の人々は小さい時から日本の残虐さを学んでいるのです。たとえ許してはいても、忘れてはいけないのだということを小さい時から教育されている事実を私たち日本人がどれだけ知っているのか。そういうことを日本人はいつも心に銘記する必要があるのです。

最後は平和への意志です。憲法改正に関する私の意見ですが、憲法改正によって、どういうことが失われて、どういう得があるのかということをもっと冷静に考える必要があります。私は、「東北アジア共同の家」を創るためには、日本国の憲法を、その理念を、その意義を深く考えながら進めていくことが絶対に必要だと思います。「共同の家」の創成については様々な提言が考えられます。もちろん文化・教育の交流をもっと進める必要があります。映画やサッカーなどのスポーツも現在交流が盛んですが、例えば安重根、伊藤博文をハルビン駅で暗殺した人物です。日本では国賊ですけど、韓国にいけば英雄です。こういう違いがあります。育ちも、伊藤博文は貧しい家庭出身ですが、安重根はかなり立派な裕福なところに生まれ育ちました。そういうことをもっと日本人は知るべきでしょう。そのためには日韓合同で映画にしたらどうだろうか。たとえば、安重根を日本人が演じて、伊藤博文を韓国人が演じて、両方から見た場合どう映るのだろうか。姜さんも前述の書でそのように提言しています。面白いと思います。それから長谷川テルです。戦争中に中国に渡って抗日戦に協力した女性です。日本では「非国民」と呼ばれましたが、中国では高く評価されています。中国に行った際、ジャムスまで足をのばし、彼女の墓に参りました。それから浅川巧も、韓国人から非常に尊敬された日本人です。私もソウルに行った時ソウル郊外に眠る彼のお墓を訪れました。そうした人たちのことを日本人は、

とくに若い人はもっと知る必要があります。その他では大学間の単位互換とか、テキストについても工夫が必要です。日本のテキストを翻訳して、例えば、近年問題となっている「つくる会」の教科書を、韓国語、中国語に翻訳して、日本ではこういう教科書もわずかではあるが使われているという事実を、そしてそれに反対している日本人も多くいるということも併せて、中国・韓国をはじめ近隣諸国の人々に知ってもらいたいと思います。一方、向こうの教科書も、日本語に訳してもらって、中国・韓国では現代史をどう教えているのかということ、それらをサブテキストとして用い、小学校や中学校や高校で広く教えたかどうかということも提案します。

その意味で、戦後60年の節目にあたる2005年に、日本と中国、韓国の三カ国の間で「未来をひらく歴史・東アジア三国の近現代史」(高文研)が刊行されたことは画期的なことだと思います。三つの国の学者、教師、市民が対話と討論を通じて歴史を共有することは至難ですが、本書はその先駆けとして大きな意義をもつでしょう。

今後ともいろいろなことを私個人でもやっていきたいと思っています。私の生きている間には出来ないかもしれませんが、「東北アジア共同の家」を是非実現したい、その実現のために微力を尽くしたいと念じます。このことを記して小論を結びます。

## 付 記

小論は、拙稿「東北アジア「共同の家」を求めて」(山梨学院大学『法学論集』57号 2007年2月)を大幅に加筆・修正し新しく注も記したものである。

## 注

- 1) この共同研究の成果については次の報告書を参考されたい。東京学芸大学・東北師範大学研究交流(1998~2000年度科学研究費・基盤研究B-2)「20世紀東北アジアにおける社会及び教育の変動と国際関係」報告書『20世紀東北アジアの社会・経済変動と教育』2001年3月、東京学芸大学・東北師範大学(研究代表者 黒沢惟昭)
- 2) 愛弟子の感懐の一例としては次のものがある。熊野純彦『戦後思想の一断片—哲学者廣松渉の軌跡』

(ナニシヤ出版、2004年)168-169頁。なお、私にはこの点に関しては次の論考も参考になった。荒岱介『廣松渉理解』(夏目書房、2004年)とくに第1章。

- 3) 私は2005年、戦後60年の節目にあたり、これまでの集大成のつもりで下記の書を刊行したがその「はじめに」において、(2)の熊野・荒岱氏の著書にも触れつつ、廣松氏の如上の問題提起についての私なりの考えを述べたのでご参看を願いたいと思う。拙著『人間の疎外と市民社会のヘゲモニー—生涯学習原理論の研究』(大月書店、2005年)その後私は次の書を入手した。小林敏明『廣松渉—近代の超克』(講談社、2007年)本書において著者の小林氏は一貫して廣松氏の生涯の思想を追究し、そのなかで同氏のアジアへの傾倒の意義の解明にも言及する。
  - 4) 教材研究交流会についてはしばしば「山梨日日新聞」や「神奈川新聞」に寄稿したが比較的まとまった最近の拙稿としては次のものを参看されたい。「教材研究交流、浅川巧の墓そして全州・韓国の旅の見聞から」(神奈川県教育文化研究所『教文研だより』122号・2006年2月)そのほか、文京洙『韓国現代史』(岩波書店、2005年)、鄭銀淑『韓国の「昭和」を歩く』(祥伝社、2005年)も参照。
  - 5) 本書は、2002年12月に大月書店から刊行され、ほぼ同時期(2003年2月)に、日本経済新聞社から邦訳出版されたボブ・ウッドワード著・伏見威蕃訳『ブッシュの戦争』と併読比較しつつ「ヨーロッパからみた戦争と平和—ブッシュと小田実の言説に学ぶ—」という一文を『解放教育』(2003年9月号)に寄せた。この時に、遅ればせながら学んだことの最大の教訓は「平和と民主主義」を両立させようとする日本国憲法の意義である。拙文自体を参照願いたい。小田氏の主張がよく表れていると思われる終わりの部分を引用しておきたい。
- 「ただ殺されるだけの『私、きみ、あなた、諸君』にとって、その側からいえばいかなる戦争も『正義』ではないという小田氏の指摘に私は強い共感を覚える。そのベースには、彼の戦争時の、大阪大空襲の原体験、「殺される」側の体験がある。その体験を基に、「ベ平連」の運動のなかで、「殺される」側の論理を練り上げたことも本文中に記されているが、その詳細は割愛する。ただし、「ベ平連」の活動のなかで、「平和憲法」がいかに偉大なものであるかを改めて考えるようになったということだけを記しておこう。それでは、平和憲法の重要性とはなにか。

「世界平和宣言」としての「平和憲法」

「正義の戦争」はありえない。この主張から導かれる結論は次のことである。再び小田氏の文章を引用しよう。

「誰がどう考えても、どのような理由があろうと、殺し合うことのない世界をつくり出すことはまちがいのない正しいことです。また誰にとってもいいことです」(小田氏書132頁)

しかし、そのような社会をどうつくり出すのか。その理想世界実現のための法制度の第1号が「平和憲法」なのである。それは「正義の戦争」はありえないということを「殺し、焼き、奪う」歴史が展開し、あげくのはてに、「殺され、焼かれ、奪われる」歴史を、つまり加害＝被害の長い歴史的経験を経て体得した日本国民が到達した人類普遍の原理なのだ。

私は小学校の頃からこの人類普遍の章句を学んできたが、「殺され、焼かれ、奪われる」側にとって「正義の戦争」などはありえないのだ、そこから、戦争全体を否定し、そこに至る軍備もまるごと否定する、そうしなければいつか必ず「殺され、焼かれ、奪われる」ことになるというどんづまりの論理から平和憲法を捉えていなかったように思う。前述した平和と民主主義という視点からいえば、「民主主義と軍隊は両立しない」という認識を世界ではじめて根本にすえて出発しようとしたのが、「平和憲法」だったのである。

つけ加えれば、「平和憲法」が世界大に広がらなければ完全には実現できないことはいうまでもない。だから、世界各国の憲法のなかでこれほど人類全体、世界全体とかかわらせて自分の国のあり方を論じている憲法はないのだ。しかし、そのためにはま

ず、言いだしべえの日本人から世界の未来、平和の実現のための自らの努力をする必要がある。ただ「護憲」「平和」を唱えているだけではだめだと小田は説く。

しかも、その具体例として小田は、個人の「良心的兵役拒否」、世界の「反核」の実現、「途上国」の債務軽減を挙げ、「なすべきことは山とある」という。」(前掲拙稿118-119頁)因みに、小田実『中流の復興』(NHK出版、2007年)も参考になる。

- 6) 例えば、網野善彦『「日本」とは何か』(講談社・2000年)34頁。古厩忠夫『裏日本～近代日本を問いなおす』(岩波書店、1998年)も参照のこと。
- 7) その後に読んだ同氏の次の書にも多くを学んだ。森嶋通夫『日本にできることは何か・東アジア共同体を提案する』(岩波書店、2001年)さらに進藤栄一『東アジア共同体をどうつくるか』(筑摩書房、2007年)も参考になる。
- 8) さしあたって次の文献が参考になる。栄沢幸二『「大東亜共栄圏」の思想』(講談社、1995年)
- 9) 岸信介については次の文献を参照のこと。原彬久『岸信介－権勢の政治家－』(岩波書店、1995年)、小林英夫『満州と自民党』(新潮社、2005年)

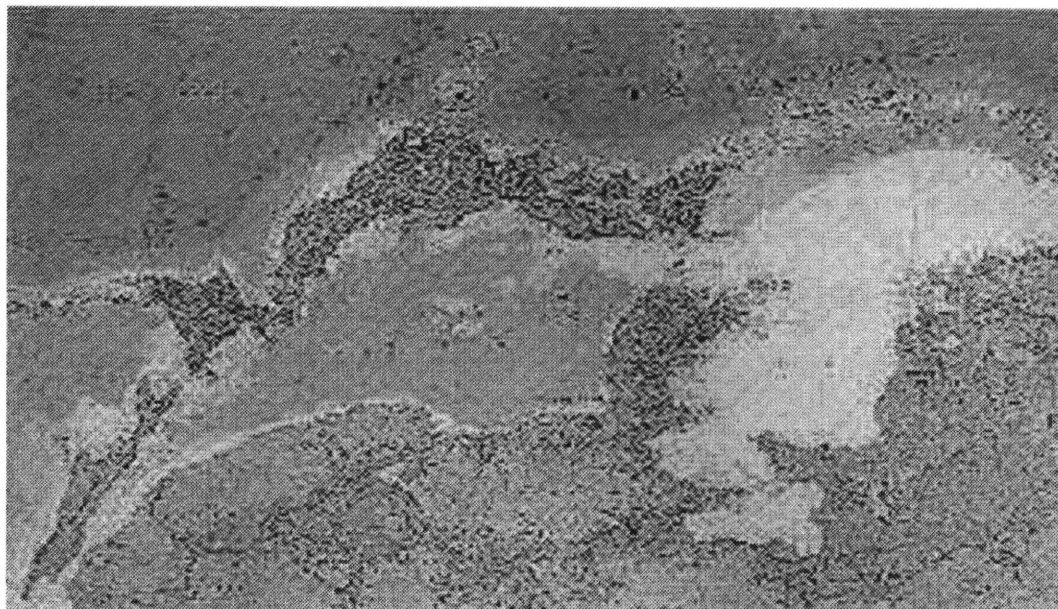
## 追記

今回充分に参考にできなかったが次の文献は小論のテーマの追究においては必読されるべきである。

山室信一『思想課題としてのアジア・基軸・連鎖・投企』(岩波書店、2004年)

また、北朝鮮に関するハンディな情報書としては次の書を校正の段階で入手、参考にした。北朝鮮研究学会編石坂浩一監訳『北朝鮮は、いま』(岩波書店、2007年)

## 資料 1



環日本海諸国図（350万分の1）「この地図は富山県が建設省（現国土交通省）国土地理院長の承認を得て作成した地図を転載したものである。（平6 聡使第76号）」転載を快諾された富山県のご芳志に御礼申し上げます。

## 資料 2

## 東北アジアの戦争80年

西暦	名称	舞台による命令	アクターによる命令
1894	日清戦争	第一次朝鮮戦争	第一次日中戦争
1904	日露戦争	第一次満州戦争	第一次日露戦争
1910	日韓併合	朝鮮植民地化	日本の朝鮮支配
1914	第一次大戦	青島戦争	日独戦争
1918	シベリア出兵	シベリア戦争	露米戦争・第二次日露戦争
1924-37	中国内戦	第一次中国戦争	軍閥対国民党・共産党
1929	中ソ衝突	満州国境の戦い	第一次露中戦争
1931	満州事変	第二次満州戦争	第二次日中戦争
1937	日中戦争	第二次中国戦争	同上の継続
1939	ノモンハン事件	モンゴル戦争	第三次日露戦争・日豪戦争
1941	大東亜戦争	太平洋戦争	日米戦争
			日本対英蘭濠中戦争
1945	日ソ戦争	第三次満州戦争	第四次日露戦争
1945	中国戦争	第三次中国戦争	国共戦争
1946	（インドシナ戦争	第一次インドシナ戦争	仏越戦争）
1950	朝鮮戦争	第二次朝鮮戦争	南北内線・米朝戦争
			米中戦争・米ソ戦争
			中韓戦争
1960	ベトナム戦争	第二次インドシナ戦争	米越戦争・韓越戦争
1969	中ソ衝突	アムール河の戦い	第二次露中戦争
1975	ベトナム戦争終了		

（和田春樹『東北アジア共同の家』（平凡社、2003年）より転載させていただいた。）



## 資料3

## 東北アジアの国・地域の面積と人口

国／地域	面積 (km <sup>2</sup> )	人口 (調査年)
モンゴル	1,566,500	2,383,000 (2000年初)
北朝鮮	122,762	22,175,000 (2001年)
韓 国	99,656	47,676,000 (2001年)
日 本	372,313	127,000,000 (2000年1月)
中 国	9,596,961	1,260,000,000 (1999年末)
台 湾	35,982	22,270,000 (2000年)
ロシア	17,075,400	145,182,000 (2002年)
ロシア極東	6,215,900	6,687,000 (2002年)
アメリカ	9,383,123	281,422,000 (2000年)
アラスカ	1,527,464	627,000 (2000年)
ハワイ	11,641	1,212,000 (2000年)

(和田春樹『東北アジア共同の家』(平凡社、2003年)より転載させていただいた。)

## 東北アジアの主な都市の人口

都市	人口 (調査年)
上 海	16,740,000 (2000年)
北 京	13,820,000 (2000年)
東 京	11,950,000 (2000年)
ソウル	10,260,000 (1999年)
重 慶	9,692,000 (2000年)
ハルビン	9,413,000 (2000年)
瀋 陽	7,204,000 (2000年)
長 春	7,135,000 (2000年)
平 壤	2,740,000 (1996年)
台 北	2,641,000 (2002年)
ウランバートル	691,000 (2000年)
ウラジオストク	592,000 (2002年)
ハバロフスク	583,000 (2002年)
ホノルル	372,000 (2000年)
アンカレッジ	260,000 (2000年)

出典：『プンタリカ・ブック・オブ・ザ・イヤー 2003』『中国郷、鎮、街道人口資料2002』『ロシア国家統計委員会による2002年センサス速報値』などによる。

(和田春樹『東北アジア共同の家』(平凡社、2003年)より転載させていただいた。)